

阪神・淡路大震災が1995年1月17日に発生してから10年が過ぎました。

あの時私たちは崩れたがれきの中から、燃えさかる炎の中から、自分の危険をも顧みることなく隣人のいのちを救おうと必死に努力しました。避難所でオニギリを分かち合って食べ、ボランティアの人たちによるブタ汁で温かい心をいただきました。見も知らぬ人々が互いに声を掛け合って励まし合いました。たしかにあの時は、被災地のあちこちで助け合い支え合いつつ“生きているところ”を実感できました。

苦しかった悲しい過去のことは早く忘れたいと考えることは人間として当然のことです。しかしあの経験の中から忘れてはならないこと、これからも私たちの次の世代に語り継ぎ、教えていかなければならないこともたくさんあると思います。と同時に、それらのことを私たちだけのところや被災地の中だけに留めず、広く国内外に伝えつづけることも大切なことだと考えます。

犠牲になった方々を追悼するということは、今生かされて生きている私たちが、人のいのちを大切に作る社会を築きあげることもであると思うのです。

本誌は、大震災の犠牲者の御霊を慰め、震災の記憶を継承し、被災地の新生を発信するために市民レベルで行われてきた追悼行事の記録を残すことにより、さまざまな追悼の思いと、震災からの復旧・復興にかけた願いをまとめたものです。

この10年間、被災地内外の人々が歯をくいしばって大切に生きてきたもの、育ててきた気持ちや、お互いに通わせた思いがもっている貴重な追悼の活動資料が散逸してしまわないよう、整理、保存し、次の世代へ残していこうとの思いから「市民による追悼行事を考える会世話人会」で発議をし、追悼行事を行ってきた162の市民団体に呼びかけ、ここに趣旨に賛同した65団体が、それぞれの10年をふり返った原稿を持ち寄りました。

編集、出版に際しては立木茂雄同志社大学教授と女優竹下景子さんから寄稿していただくことができました。

原稿、写真、および資料の整理には、今枝幸子さんはじめボランティアの皆さんにご担当いただきました。また、阪神・淡路大震災10周年記念事業推進会議、コープこうべ、浄土宗済麟寺から格段のご協力をいただきました。ここに記してお礼を申し上げます。

大震災を経験した私たちだからこそ残せるこのささやかな記録が、この被災地はいうまでもなく、世界各地で起きている大災害の犠牲者の追悼、記憶の継承、復興と新生に少しでもお役に立てればと願っています。ご一読をいただければ幸いです。

「市民による追悼行事を考える会」世話人
 明石和成 震災を生きる宗教者のつどい
 計盛哲夫 21世紀ヒューマンケア研究機構
 島田 誠 アート・サポート・センター神戸
 西 義人 コープこうべ
 山口一史 ひょうご・まち・くらし研究所